

しかしながら本書が行政法學の根本問題につき、頗る明快に批判されてゐることは、教へられるところ多きこといふ迄もない。就中自由裁量の問題と行政裁判所の権限とを一應別個の問題とし、裁量の限界と裁量權の否定も亦區別さるべきものとし、訴が適法なりや否は専ら本案の性質によつて定まるものとし、警察權の限界論を警察の觀念論及び根據論と異るものとされるが如きはこれである。終に紙數の制限の爲に本書の全貌を傳へることが出來ず、又粗雑なる所感によつて禮を失したることは、教授の御寛恕を請はなければならない。

高島善哉著

『經濟社會學の根本問題』

酒井正三郎

高島教授の近著『經濟社會學の根本問題』は、その序文において記されてゐる通り、教授が學窓を出て經濟學研究の旅に出でられてから十數年の永きに亙る思索の結晶である。しかもこ

の十數年こそは我が日本の國歩にとつて洵に問題的な一時期であり、したがつて學界に身をおいて眞劍に思索し、正しい道を發見しようとするものにとつては、並々な艱苦難の一時であつた。しかも教授は強い意力の下に、敢然身を挺してこの荆棘の道を歩まれ、遂にその永き研究生活の中から遂に正しい方向を發見して、學界にその成果を問はんとせられてゐるのが本書なのである。この意味において教授が身を以て書かれた本書こそは、洵に我が學界にとつて貴重な收穫であり、同じ學界に籍ををくものにとつては、教授に従つて十分その思索の跡を尋ね、我々の向ふべきこの學問の正しい方向を反省すべき必要のあることは、素より當然の義務である。私が敢へて本書の紹介をここに試みんとするのも、一に全く以上のごとき動機に基づく。

二

しからは教授がいまその長き研究から引き出された今日の經濟學の正しい方向は、どこにあると結論されてゐるのであらうか。いふまでもなく、これこそ本書の標題に明かなごとく、いはゆる「經濟社會學」なのである。それではいつたい經濟社會學はどのやうな性格をもつところの學問として提唱されてゐるのであらうか。この問題にまづ答へるものが、本書第一部「經

濟社會學の課題」であるから、我々はまづこの點についての教授の主張を聴くこととしよう。

教授の見解によれば、經濟學には從來二つの全く對立する型が存在した。その一方は客體的合理的な分析を任とするところのいはゆる「合理的理論」であり、それは今日においては純粹經濟學のうちにも最も完全な典型を見出すものとされ、他方は經濟生活の全體的な把握を主眼とするところのいはゆる「直觀的理論」であり、それは現代においては政治經濟學のなかに、最も好個の模型を發見できると考へられてゐる。この二つの理論に對して教授はここに新に第三の科學として經濟社會學を主張せられるのであるが、しからばなに故に前の二個の理論がこの新しい理論によつて克服せられなければならないとせられるのであらうか。

これに對する答へは簡單にいへば、次のやうである。まづ第一に、いはゆる合理的理論が現實分析の理論として鋭い迫力をもつのは、それが歴史的直觀によつて支へられ、具體的な全體認識の一部として考へられてゐる場合であつて、それがかやうな根據を失つてしまへば、そのやうな現實認識の強力な補助手段であることはできない。この意味において合理的理論は直觀的理論の與へる全體認識に媒介せられて、初めて固有の強みを

發揮することができるといふはなければならない。ところが第二に、いはゆる直觀的理論が實踐的な理論として正しい指導力をもつためには、それが單に直觀的なものではなくて、むしろ客體的なものによつて反省され、合理的なものによつて媒介されてあらねばならない。しかるに從來の純粹經濟學はあまりに客體的・分析的・合理的な理論として完成せられたために、その歴史的直觀的地盤を喪失してしまつてをり、また他方においてこれまでの政治經濟學はあまりに主體的・綜合的・直觀的であつて合理的理論の媒介を缺如してゐる。かやうにして、これらの理論はいづれも現實の正しい分析の現論となることはできず、また現實においての正しい行爲の論理となることはできない。この意味で現實に對してかかる分析力と指導力とをもつところの經濟學が確立されるためには、直觀的理論は合理的理論によつて、合理的理論は直觀的理論によつて正しく媒介されてあらねばならないのであり、このやうな要求に即して從來の二つの型の經濟學が相互媒介的・辯證法的に統一するものとして定立されたものが、第三の科學としての經濟社會學に外ならないのである。

以上によつて我々はいはゆる經濟社會學の目標と方法とを把握したのであるが、それが何故に經濟社會學の名によつて提唱

せられるのであらうか。惟ふに經濟を單に經濟としてみることは、純粹社會學的な考へ方の特徴であり、社會を單に社會としてみることは、政治經濟學的な見方に立つものであり、上述のやうに經濟を通じて社會をみ社會において經濟をみると志向するのであれば、それは單なる經濟學でも、社會學でもなくして、正に經濟學と社會學との内面的統一として經濟社會學と規定せられることが、從來の二つの理論と區別するために相應しく考へられたことに基づくのであらう。

しかし經濟社會學なる概念はこれまで學界においてかやうな意味で使用せられてはゐなかつた。かくして例へば純粹經濟學者が經濟社會學をいふ場合においては、それはいはゆる與件に關する社會學的研究を指してゐるのであつて、この場合においてはそれは理論形成のための準備作業を意味してゐても、それは自身理論として純粹經濟學にとつて代るものを考へてゐるのではなかつた。ここに提唱せられる經濟社會學がかくのごときものでないことは固より當然である。

ところが經濟社會學なる名稱の下に從來考へられてきた第二の考へ方は、經濟の社會學もしくは經濟的社會學としての經濟社會學である。この場合には一般的社會學があつて、その經濟への具體的適用としての社會學が考へられてゐるのであるが、

かかる場合においてはそれは經濟時代の社會學として、經濟社會學が主張されるときに、社會學は經濟學の助けによつて、現實科學化せんとしてゐるのではなく、經濟への社會學の應用にすぎないのである。現實分析の力に缺けるところあるのも、また當然である。

しかるに第三に可能な場合は、社會學的經濟學としての經濟社會學である。この場合はそれは單に特殊社會學として、第二の場合のごとく經濟學たる欲求をすてるものではない。却つて國の經濟學たらんことを志してゐるのであり、即ち社會學的方法による經濟學として、それは純粹經濟學に對立せんとしてゐるのである。しかしこの場合も經濟學は眞に社會學と内面的に統一されることによつて經濟時代を克服すべき歴史形成の理論にまで成熟してゐない。かくして教授の經濟社會學は、或る意味において理論としての從來の經濟社會學と志向を等しくしながら、なほそれを超えて進まうとする。そしてその立場の特殊性は社會學を經濟學化すると同時に、經濟學を社會學化するところに見出される。

三

以上によつて教授の提唱にかかる經濟社會學の性格は一應明

かにされた。しからばこの意味の經濟社會學は、いかにして具體的に建設せられるのであらうか。これに對して教授はこの問題の解決がスミスとリストとの比較研究によつて可能であるとされ、第二部と第三部をあげて、それぞれアダム・スミスとフリードリッヒ・リストの學説を検討する仕事に費されてゐる。我々はいまこの短文のなかで、教授の最も力を注がれた二個の學説についての貴重な研究成果を一々こゝに引用することができないのは、甚だ残念である。しかし讀者は何故に、經濟社會學の建設のために、この二人の學説が特に顧みらるべきであつたかについては、その理由を問ひ質すであらう。スミスの學説こそは純粹經濟學の最も有力にして、古典的な一例であり、そしてリストの所説こそは政治經濟學の最も古く、しかも最も典型的な場合であることを理由として、いま經濟社會學がこれら二個の理論の相互媒介的統一であるとすゝる立場からして、それぞれの立場を代表するこの二人の學説の検討が、經濟社會學の具體化のためには必要であつたと答へることができであらう。しかし更に鋭い讀者はそれにも拘らず上述二人の學説がなによゝゝ特にそのために選ばれたのであるかを追及するであらう。これに對して教授の答へは大體次のやうであると考へられる。即ちまづ第一に、スミスこそは、その全體の學説を仔細に調べ

ば、單に今日の純粹經濟學者のごとく、全體的認識から游離した客體的分析理論を説いたものではなくて、歴史の直觀を基礎とした合理的理論を呈示したものであり、この意味では教授の自ら提唱せられてゐる經濟社會學の原型がすでにここに見出されるからである。しかし不幸にしてスミスにおいては優れて經濟的な市民社會は歴史的なものであり乍ら、しかもなほ永遠の相の下に把握されざるをえなかつた。しかるにリストにとつては、市民社會はかく歴史的に與へられたものではなくして、創らるべきものであつた。ここに彼においては市民社會の創造が問題となり、主體的・實踐的な理論が提唱されざるをえなかつたのである。この故にリストにおいては歴史による媒介といふ思想が強く現はれてゐる。ところが今日の政治經濟學の主張のなかには、經濟社會學において要求せらるべき歴史による媒介の論理が缺如してゐる。かくして我々はリストにおいてもまた經濟社會學の志向に最も近い、政治經濟學の型を見出すのである。このことが教授をして經濟社會學への王道としてスミスとリストに還ることの必要を説かしめるのである。

しかし、この二人の學説がいかに今日の經濟社會學に近いものであるとはいつても、それ自身がすでに經濟社會學として教授の提唱せんとするものを完全に具現してゐたものとするこ

はできない。けだしスミスにおいては、上述のごとく歴史の媒介がなく、また反対にリストにおいては合理的把握力の不足が目だつからである。かくして眞の經濟社會學への道は、この二人の學說を相互媒介的に統一するところにあるとせらるること、その必然的な結論である。スミスによつてリストを理解し、リストによつてスミスを説かしめよ。しかしこの場合かく理論と政策とを媒介するものはとりも直さず歴史であり、かかる意味で歴史が重要視せられること、これが經濟社會學の行き方である。理論も政策もこれまであまりに歴史を忘れてゐた。經濟社會學はいま歴史の尊重を説かんとするのである。

四

以上において私はいはゞ經濟社會學の根本問題に關する教授の主張の大綱を語つた。かくしていまや私は進んでこの教授の提唱そのものについて、私見を述べる順序となつた。すでに本文最初にも書いたやうに、本書に盛られた思想は、教授の十數年の永きに互つてつゞぎに思索を重ねられた結晶であり、それだけにそのなかに現はれてゐる教授の思想こそは、我々經濟學徒がもし虚心坦懷に考へれば、今日の經濟學に對してその正しい方向を示したものであるとして、その價值を承認せなければならぬであらう。ことに、私は從來、歴史的現實としての經濟生活の構造が主體的にして客體的であり、また客體的にして主體的であるから、その科學的な把握が完全に行はれるためには、經濟科學は正に教授の主張のごとく、純粹經濟學的なものと、政治經濟學的なもの、もしくは自然科学的な考へ方と文化科學的な考へ方との止揚と統合において成立する生活科學的把握を必至とすると説いてきた。このやうな立場からすでに明かなごとく經濟社會學が上記の性格をもつものとして構想されてゐる以上教授の主張の方向には双手をあげて賛意を表しなければならぬ。しかし私にとつてはその具體的建設が果してスミスとリストに還ることによつて可能かどうかといふことが、若干疑問である。なるほどスミスをリストによつて、またリストをスミスによつて理解することによつて、過去の歴史的現實は從來よりもより克明に描き出されてはゐる。このことについては私は教授の勞作に對して十分敬意を表さなければならぬと思ふ。しかし現在を克服せんがために、現在の歴史的現實をよりよく分析せんとしてゐる我々にとつて、かくのごとき仕事が直ちに十分我々を満足せしめることができるであらうか。スミスとリストにとつては市民社會の分析と建設がせいぜいのところその歴史的な課題であつた。しかし二十世紀の今日は教授もい

はれる通り、市民社會の分析とむしろその克服が問題となつてゐるのである。この意味の危機科學としてもし經濟社會學が提唱されるのであれば、それは單に學說史の理解を超えて、現實それ自身の理解、そして現代の問題を把えて、それを析出することに重點が置かるべきではなからうか。むしろ教授自らこのことを自覺してゐられるに違ひないが、それが果してミスとリストに歸ることを通じて直ちに達成されるであらうか。私の疑問はここにある。なるほど今日の經濟學のもたなければならぬ方法と目標は、したがつて又その性格はそこに正しく把握されてゐる。しかし依然としてその具體的な建設は残るのではなからうか。この意味では教授も序において自らいはれる通り、すべてはまだ初められたばかりであるといふこともできる。私は教授が他日この正しい出發點の上に實り多い學問的收穫をあげられる日を日本の學界のために今から非常な期待をもつて待ち望む一人である。

高橋泰藏著

『貨幣的經濟理論の新展開』

飯 田 繁

ハイエクならびにケインズの調期的著述があらはれてからの「最近略は十年間に於ける貨幣理論的著作と呼ばれるものゝ多くは、一面所謂貨幣的景氣理論たることを企圖したものと見られると同時に、他面經濟學自體の動態理論的傾向の表はれとも言ひうるものであつて、この意味からその最近に於ける活潑なる展開は經濟學に於ける一つの注目すべき現象と言ふべきであらう。本書はこれら最近の貨幣的理論について、その代表的なるものゝ示す動向を明かにすることを目的としたものであるが、しかし所謂貨幣的動態理論は單純に貨幣理論の動態理論的發展を示すものでもなく、また動態理論の貨幣理論的展開を意味するのみでもなく、その根柢には共通する一つの意圖の流れてゐることを見逃してはならないであらう。このやうな根柢を